様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７７９

研究課題名（和文）近世阿波における森林資源と地域社会に関する構造論的研究

研究課題名（英文）Structual Research on the Forest Resources of Mountain Villages in Early Modern Awa

研究代表者
町田　哲（Machida, Tetsu）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：６０３８０１３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、阿波国那賀川流域を事例に、近世日本の森林資源をとりまく生業と流通を、地域に生きた人びとを軸に構造的に明らかにすることを目標とした。
　成果として第一に、当該地域随一の質量を誇る湯浅家文書の整理と全点写真撮影を進めることで、当文書群を今後活用できるための基礎条件の整備をめざした。
　第二に、材木・薪炭のみならず椎茸・紙・茶など多様な森林資源（産物）が地域の場でいかに産出されたのか、またその流域からの流通構造の展開と藩による統制との関係を、歴史具体的に解明した。とくに近世前期における分一徴収のあり方や、後期の仁宇谷産物仕法など、藩側が産物流通を統制しながらもそれに吸着する実態を解明できた。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the economic activities of residents of Awa Province’s Nakagawa River Basin, this research attempted to structurally elucidate the network of social relations surrounding occupations related to and the distribution of forest resources in early modern Japan. It resulted in two major achievements.
First, by cataloguing and photographing the region’s largest, most diverse set of early modern records, the Yusawa House Document Collection, this research has prepared the groundwork for future research utilizing those records.
Second, it demonstrated in a concrete manner how a variety of forest resources, including lumber, kindling, shiitake mushrooms, paper, and tea, were produced and transported from the region. Moreover, it examined the relationship between the development of distribution networks originating in the Nakagawa Basin and domainal regulation.

研究分野：日本近世史

キーワード：山村　森林　資源　地域　請負　産物　流通　流域

１．研究開始当初の背景

（1）本研究の現代的意義

高度経済成長期以降、村を中心とした伝統社会が解体し、列島社会の大きな変動期をむかえてきたことが指摘されて久しい。さらに21世紀に入り新自由主義が横溢する現在、地方の山間地域において、65歳以上の高齢者が住民の過半数を占めるいわゆる「限界集落」が出現している。例えば徳島県では全集落の四分の一、433集落が「限界集落」となっている(1)。生活共同体としての集落の機能が急速に衰えつつある現在、山間地域における人びとの営みを新しい形でいかに再生していくか、真の意味での「地域再生」が求められてきている。

こうした山間地域の抱える現代的課題に、地域史研究はいかに応えることができるのだろうか。機能別に分散化してしまった、生産・労働・生活・文化をもう一度統合し、商品を媒介としない人と人との関係の復活をふまえた、「市民の生活世界＝〈地域〉の再生」(2)が目指されるべき今日にあって、一見迂遠なようであるが、やはり山村地域の特徴と展開を、歴史的にかつ地域史の視点でトータルに解明することが重要である。

とりわけ、近年のエネルギー問題への関心の高まりの中、自然資源と密接に展開してきた人間生活についての、長期的かつ歴史的分析が求められている。そうした中、森林資源の活用が高度化すると同時に、都市とその周辺社会の消費・需要に翻弄された結果、枯渇化や限界が明らかになったという近世社会の実態を、精緻かつ大胆に解明することは、現代的課題の歴史的形成過程の一端に光をあてることになろう。

（2）近世史研究における森林資源と地域

一方、従来の近世史研究では、山の所有や、その林業的利用関係の解明などが、主に「林業史」として展開しており、分厚い成果がある(3)。これらの研究では幕藩領主の木材需要に支えられた林業のあり方を網羅的に検討していたが、林業が地域にいかなる影響を与えたのかという視点がやや弱かったといわざるをえない。

また従来の研究では、近世・近代の山村を、平地の村落と比べて生産力が低位な後進地域、あるいは石高制の貫徹しない「高外地」であるが故の特殊な地域として捉えられる傾向にあった。こうした評価に対する批判として、1990年代後半以降、林業だけでなく山村の生業や暮らしの多様で固有な構成論理に注目する研究が現れ、山村研究は新たな段階に至った(4)。焼畑と雑穀生産の具体的実態、山村の空間的把握、林業と豪農経営の関係など、山間地域の多様な側面が解明されつつある。

しかし課題は多い。とりわけ、林業史・山村史研究は、各分野の枠の中に限定され、1990年代以降の地域史研究の新たな段階をふまえた地域の社会構造分析、あるいは都市等の外部社会との関係についての検討が不十分である。この点、2010年刊行の後藤雅知他編『山里の社会史』(5)や大友一雄他編『近世の環境と開発』(6)などでは、こうした点の克服や、山請負人の特質、森林資源の維持・収奪の実態等の解明が目指されているが、まだ緒についたばかりであった。

２．研究の目的

そこで本研究では、研究史上の成果や残された課題をふまえ、かつ研究代表者がこれまで取り組んできた地域社会構造分析の手法や、近世阿波の山村の地域特性に関する研究成果を加味しながら、次の３点に重点化した研究視角を設定した。

1）山村における土地所有と生業の実態解明

近世山村における生業が極めて多様であることは近年の山村研究でも明らかであるが、近世阿波についての解明は極めて遅れている。従って、材木・薪炭・雑穀・椎茸・楮（紙原料）・茶等の育成・栽培といった、森林資源の利用実態を、山の土地所有と関わらせながら解明することをめざした。

2）請負人による森林資源の利用実態の解明

山請負人のあり方については、近世の山野河海に対して多様に展開する請負人の一つとして注目されている(7)。本研究の対象とする木頭地域においても、近世初頭には徳島城下の初期豪商が、中期以降は、木頭地域から流れる那賀川の河口部に所在した売人（材木商）が、山を請け負っていた。彼ら請負人が、木頭地域の住民と如何なる関係を持ちながら、山請負を実現していたのか、相克も含めて解明した。

3）森林資源をめぐる藩の支配関係の解明

近世の森林資源をめぐっては、単に都市の需要と山からの供給との関係だけで展開するのではなく、藩による支配の特質に大きく影響を受けている。徳島藩の山林支配については、既に前期については解明したが、より都市部からの需要が高まる近世中後期における藩の政策と、その下での森林資源の搾取・再生産の実態解明をめざした。

以上の３点を軸に、普請用材としての木材、燃料としての薪炭、紙、刈敷などに利用してきた多くの森林資源を、いかに管理・利用し、再生産してきたのか。近世阿波における森林資源の維持・収奪をめぐる地域社会の変化を、支配構造・市場構造との関連の中で捉え直すことをめざした。

３．研究の方法

（１）全体の方法

本研究では、阿波における山間地域のうち、林業経済史の中で「林業地帯」(8)とされてきた木頭地域を主たる対象とした。しかし、「林業地帯」といっても、近世におけるその内実

は、林業に傾斜した地域ばかりではなく、多くの産物を生む雑木林や、非林業で焼畑等が展開する地域など、多様性に富んでいる。かかる地域が、近世から近代にかけていかなる形で「林業地帯」へと変容していったのか、そこに生きた人々の生活世界にとっての意味を根底にみすえながら、上記 3 点の視角に即して、森林資源の利用実態の展開を解明した。

なお、作業対象および内容にそって、①基礎史料調査、②コア地域史料調査・研究、③広域連関地域研究、④森林資源関係史料の翻刻に区分して、計画をたて、研究を遂行した。

（２）年度計画

【平成 25 年度】

① 基礎史料調査（初年度のみ）

近世阿波における山村支配や林業史に関する史料を網羅的に収集した。具体的には、国文学研究資料館所蔵「蜂須賀家文書」、徳島城博物館寄託「蜂須賀家文書」を調査した。

② コア地域史料調査・研究

当該地域の組頭庄屋（大庄屋）であった「湯浅家文書」（現那賀町木沢）の古文書調査及びフィールド調査を実施した。木箱 12 箱分の古文書について、徳島県立文書館の協力を仰ぎ燻蒸処理をした上で、大学に長期借用して、現状記録化の作業を開始した。

④森林資源関係史料の翻刻

「旧木頭村役場文書」（現那賀町木頭）と「御林成行記」（徳島城博物館寄託）の翻刻作業を進めた。

【平成 26 年度】

②コア地域史料調査・研究

初年度に引き続き「湯浅家文書」の古文書調査を実施した。本文書群は、従来から何点かの史料は部分的に翻刻されているが、その全容は明らかとなっていない。しかし、調査を進める中で、木頭地域から産出する茶・楮・炭などの流通統制に関する史料や、材木・炭生産に関する多くの争論関係史料が多数含まれていることが判明した。そこで本研究では、史料群全体の目録化および全点写真撮影を方針とし、その作業を進めた。

あわせて、「御林成行記」をもとに近世後期の御林の分布とその制度的特徴を論文として発表した。

【平成 27 年度】

②コア地域史料調査・研究

引き続き「湯浅家文書」の古文書調査を実施した。12 箱中、10 箱分の現状記録作業を終了し、4 箱分の全点写真撮影を完了させることができた。

また、平行して近世前期の請負人と分一徴収についての分析を進め、原稿化を果たした。

③ 広域連環地域研究

材木・薪炭・茶などの山の産物を、川を下して移出する際には、必ず下流に位置する藩の分一所で分一銀（関税の一種）を徴収された。したがって、供給地―消費地間の関係を考察する第一段階として、徳島藩の分一制度を全面的に検討し、論文化した。また、近世大坂の材木仲買関係文書（大阪府立中之島図書館所蔵）のデータを収集し、木材の流通組織について分析条件を整えた。

４．研究成果

本研究では、湯浅家文書という、地域に遺された歴史資料を新たに発掘することをベースとして、近世の阿波国那賀川流域における木材・薪炭・椎茸などの多くの森林資源を、地域社会がいかに管理・利用し、再生産してきたのか、またそれを藩権力側がいかに統制し吸着しようとしていたのかを、実証的に解明することができた。全体的にみて、当初の目的は達成されたといえよう。

なお、湯浅家文書は、山村の所有や森林資源のありようや、さらには森林資源をめぐる藩の支配をみる上で好個の史料群であり、その現状記録化と写真撮影（全点）は避けて通ることのできない作業課題である。しかし、初年度に想定以上の大量の古文書（木箱 12 箱分）の存在が確認され、その整理作業を全力で進めたが、膨大さ故に本研究期間中には完遂することができなかった。今後の継続課題とし、より地域の歴史遺産として保全・活用できるように万全を期したい。

研究成果として具体的には、次の点を解明できたことが特筆される。

（１）近世前期の請負人と分一徴収

第一に、近世前期の那賀川流域の請負人の実態を、寺沢六右衛門を事例として解明することができた［論文①］。寺沢は、17 世紀初頭以来、蜂須賀蓬庵（藩祖家政の隠居名）と密接的な関係を持ち、その隠居領周辺の代官的機能と請負人機能とを併せ担う存在であった。彼は吉野川・勝浦川・那賀川河口での分一徴収請負を担うとともに、殿河内御林（勝浦川上流）や木頭山（那賀川上流）等の御林の伐出を請け負い、藩へ一定の運上銀を納入する見返りに、その用益権等を確保していた。

しかし 17 世紀中頃以降、徳島藩は、分一徴収を、請負方式ではなく、藩の役人が代銀で直接徴収する方式に転換させた。それは、大坂向材木など、領内河川における産物流通の広がりに目をつけた藩が、それまで請負人が確保した利益分を藩財源として吸収することを意図したものだった。

請負人の実態を通じて、17 世紀における藩の産物統制のあり方の変化と、当該期から既に大坂への材木需要が高かったこと等も明らかとなった。

（２）徳島藩の御林の分布と特徴

第二は、従来明らかでなかった、18 世紀後

半から 19 世紀前半にかけての、徳島藩の御林の分布とその特徴について解明した点である［論文②］。国絵図や新出史料である「御林成行記」をもとに考察した。

阿波国北部において、御林は数が少なく、松や雑木の小規模な御林が大半であった。また 18 世紀末以降、藩は、御林から藩用材を確保するのではなく、むしろ地元の百姓や村から毎年運上銀を徴収し、その見返りに彼ら百姓らに御林の用益を委ねる方法をとっていた。

一方、阿波国南部においては、勝浦（かつうら）川・那賀（なか）川流域では、藩用材確保の場として、大規模な御林が集中して設置されていた。それは、薪炭となる雑木だけでなく、杉・檜など建築用材となる樹種が生育しており、また川を通じて材木を搬出しやすい条件もあったからである。既に 18 世紀後半には、一部の御林で、藩主導による植林が実施されている。

同じ徳島藩領の御林であっても、その実態は地域的に異なる様相を帯びていた。だからこそ今後は、御林と関わって存立していた山村社会を、より具体的に地域に即して分析していく必要があろう。

あわせて、こうした御林掌握の背景にある寛政期の御林改革の歴史的意義についても、初めて解明することができた。

（３）山村の地域社会構造

第三に、産物生産の場である山里の地域社会構造について分析を進めた。具体的には、湯浅家が居住した那賀郡木頭村を事例として、産物を生産する上での基盤である土地所持状況や自然環境、および「株」と呼ばれる村内組織と流通機構との関係などの分析を進めた。その分析成果については今後論文として発表する予定である。

（４）個々の産物と統制

第四は、産物生産と流通統制についての解明である［図書①］。例えば椎茸は、18 世紀後半以降に山里の新たな産物として注目され那賀川流域で生産が盛んとなった。ただし、技術的熟練度は定位であったが、楮木用の雑木や日用を確保する必要上から、ある程度の資金力が必要となる産物生産であった。

藩側は当初、椎茸作伝播者である者に一定の冥加銀を上納させる見返りに、椎茸作人からの集荷・掌握を一任させる「一手仕成」という請負制を認可した。しかし、椎茸作の盛行を前に、藩側は文化 9 年(1812)以降、各作人から産出量にみあう冥加銀を直接藩制機構が回収する「椎茸作方制道」を導入する。さらに市中椎茸問屋への産物統制強化と、大坂での「御国椎茸定問屋」の設置を果たし、新興作目椎茸を藩専売制の下に掌握しようとしたのである。

産物流通の盛行を前にそれを藩の掌握下に置こうとする方向性は、17 世紀の分一銀徴収の制度化と共通するが、椎茸作の場合に、生産から流通までの全体を藩の統制下におき、そこからの冥加銀等を確実に確保する点や、産物の国産化を目指そうとする点は、19 世紀前半に特徴的な動向といえよう。請負制から国産化・専売制への転換過程と位置づけることができる。

このほか、楮・紙生産の動向についても検討を加えた。

（５）諸産物をめぐる藩の動向と地域

第五に、そうした諸産物全体の統制を目指す藩側の動向を、仁宇谷産物趣法から解明した［論文③］。天保期に開始された仁宇谷産物趣法は、那賀川流域の山方百姓らに藩からの趣法銀を貸し付け、多様な産物を那賀川河口の天神原引請所（領家村）に廻送させることで趣法銀を回収するという制度である。いわば銀子貸付と産物流通統制とがわかちがたく結びついていたこの制度は、那賀川流域の組頭庄屋３人（元取）と村役人らとの連携のもとで実施された。しかし実際には、天神原引請所ではなく別の場所に販売する「抜荷」が横行した。そこで藩や元取らは、天神原より上流の上大野村に久留免田出張所を設置した上で、山方での買集の側面と、産物の廻送の側面との両面において取締を強化し、趣法銀の回収を目指した。従来、その存在は知られていた仁宇谷産物趣法について、本稿では，史料に即して再検討し、段階的にかつ産物流通の担い手に注目して解明することを提起した。

あわせて、仁宇谷産物趣法のその後の展開を解明し、小寄人と呼ばれる流域の仲買や高瀬船船頭の動向を解明し、論文化にむけた分析を進めた。

〈引用文献〉

(1)『徳島新聞』2007 年 1 月 1 日朝刊記事。
(2)吉田伸之「地域把握の方法」（歴史学研究会編『国家・社会像の変貌』青木書店、2003 年）。
(3)所三男『近世林業史の研究』吉川弘文館、1980 年等。
(4)米家泰作『中・近世山村の景観と構造』（校倉書房、2002 年）、白水智『知られざる日本－山村の語る歴史世界－』（日本放送協会、2005 年）、加藤衛拡『近世山村史の研究』（吉川弘文館、2007 年）など。
(5)後藤雅知・吉田伸之編『山里の社会史』山川出版社、2010 年。
(6)大友一雄・根岸茂夫他編『近世の環境と開発』思文閣出版、2010 年。
(7)高橋美貴「仙台藩における御林の存在形態と請負」（斎藤善之・高橋編『近世南三陸の海村社会と海商』清文堂、2010 年）、後藤雅知「近世後期岩槻藩房総分領における真木生産と炭焼立」（『歴史学研究』893、2012 年）、拙稿「近世前期の祖谷山請負商人と大坂」（塚田孝編『身分的周縁の比較

史』清文堂、2010 年）など。
(8)有木純善『林業地帯の形成過程』（日本林業技術協会、1974 年）、半田良一「林業経営と林業構造」(『林業経済』20-6、1967 年)。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３件）
① 町田哲「寺沢六右衛門―近世前期阿波の山請と分一」『史窓』46、2016 年刊行予定（頁数未定）
② 町田哲「近世後期徳島藩における御林の分布と構造」『鳴門教育大学研究紀要』30、2015 年 3 月 13 日、pp.341-365
③ 町田哲「仁宇谷産物趣法に関する基礎的考察」『阿波学会紀要』60、2015 年 3 月 1 日、pp217-223

〔学会発表〕（計　２件）
① 町田哲「仁宇谷産物趣法と流域経済」（第 2 回「近世の身分と地域」研究会、2015 年 12 月 7 日、東京大学出版会会議室、東京都目黒区）
② 町田哲「仁宇谷産物趣法に関する一考察」（徳島地方史研究会 5 月例会、2014 年 5 月 31 日、徳島県立文学書道館、徳島県徳島市）

〔図書〕（計　１件）
① 町田哲「一九世紀前半の椎茸生産と流通―徳島藩領那賀川上流域を事例として―」（塚田 孝・佐賀 朝・八木 滋編『近世身分社会の比較史―法と社会の視点から―』大阪市立大学文学研究科叢書第８巻 清文堂、2014 年 3 月、pp39－62）

６．研究組織
(1)研究代表者
町田　哲（MACHIDA　TETSU）
鳴門教育大学大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：60350135